

最優秀賞（五・六年の部）

家族とのおうですもう

玉川村立玉川第一小学校 六年 矢吹 介人

「レディーゴー！」

ここに、ぼくの中での力試しが始まった。小学六年生になったぼくは、自分の力がそこそこ強くなったことを証明するために、家族うですもう大会を開さいすることにした。

初戦の相手は五さいの弟だ。五さい児なので、余ゆうで勝てるなと思った。しかし、いざ試合を試してみる、と、ぼくが思っていた以上に力があってびっくりした。ぼくも五さい児の時はこんなに力があつたかと、自分が五さいだった時のことをふり返った。試合はぼくが勝ったが、その後何度もいどんでくる弟に負けたふりをした。また十年後くらいに勝負をいどんできなとぼくは心の中で思った。

二回戦の相手は小学四年生の妹だ。二さい年下だし、女の子なので、こちらもさすがに負けるわけがないと思った。妹とは、あまり手をつなぐことがないので勝負をしようと手を組んだ時、少し照れくさかった。試合も予想通り、ぼくが楽勝だった。ここまでは、ぼく勝てる自信を持っていた戦いだが強てきはここからだった。三回戦の相手は、中学一年生のお姉ちゃんだ。お姉ちゃんのパワーはすごい。以前、遊びですもうと一緒にやったことがあるが、その時はすぐにおしたおされてしまった。ぼくは、なるべくお姉ちゃんがつかれている時の方が勝機はあると思ひ部活後をねらって勝負を申しこんだ。全力でたおしにいったが、全力でたおされてしまった。四回戦の相手は、お母さんだ。お母さんの手はぼくと同じくらいで、体格も大きい方ではない。ぼくは、もしかしたら勝てるかもしれないと思った。そう思いながら手を組んだ時、ぼく小さい時は、あたり前のようにつないでいたのに、今はなかなかつなぐことがなくなったとなんだかなつかしい感じがした。そして、手を見ると、しわや所々に小さなきずがあつて苦労しているなと思った。ぼくは勝負には負けてしまったが、お母さんには「ありがとう。」と感謝の気持ちでいっぱいになった。

最後の戦いはお父さんだ。ぼくのこと簡単持ち上げられるパワフルなお父さんなので、かなわないかもしれないけれど、勝つぞという言葉をむねに勝負をいどんだ。ぼくは今出せる力をお父さんの手にぶつけた。お父さんはやりと笑うとぼくの手をテーブルにたたきつけた。ぼくの完敗だ。そう思っていると、お父さんは、「少しは力がついてきたな。でもまだまだだ。いつでもかかってこい。」とぼくに言った。正直、くやしかったが、力がついてきたことを少しでも認めてもらえてうれしかった。

家族とうですもうをすることで、楽しい時間を過ごすことができ、家族の大切さに気づけた。また、勝負をいどみたい。

